

直前東大力学特講



問題

【1】

《解答》

(1) 台 + 物体 についての力のつり合いより,

$$(M+m) \cdot 0 = kd - (M+m)g \quad \therefore d = \frac{(M+m)g}{k}$$

(2) (1) と同様に, 台 + 物体 についての力のつり合いより,

$$(M+m) \cdot 0 = k(d+s) - F_s - (M+m)g \quad \therefore F_s = ks$$

(3) 台 + 物体 の受ける合力 F は,

$$F = -k(x-d) - (M+m)g = -kx$$

(4) (3) より, 台 + 物体 の運動方程式は,

$$(M+m)\ddot{x} = -kx \quad \therefore \ddot{x} = -\frac{k}{M+m}x$$

これより, 台 + 物体 の運動は, 振動中心が $x=0$, 角振動数が $\omega = \sqrt{\frac{k}{M+m}}$ の単振動とわかる. よって, 周期 T は,

$$T = \frac{2\pi}{\omega} = 2\pi\sqrt{\frac{M+m}{k}}$$

(5) $\ddot{x} = a$ なので, 台, 物体それぞれの運動方程式は,

$$\begin{cases} ma = -k(x-d) - N - mg \\ Ma = N - Mg \end{cases}$$

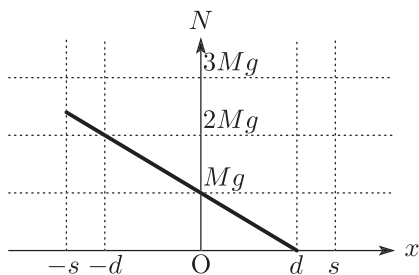
(6) (5) の 2 式より, a を消去すると,

$$N = Mg - \frac{M}{M+m}kx$$

さらに, (1) の結果を用いて k を消去すると,

$$\begin{aligned} N &= Mg - \frac{M}{M+m} \cdot \frac{(M+m)g}{d} \cdot x \\ &= \frac{d-x}{d}Mg \end{aligned}$$

(7)



(8) $x = x_0$ に達したとき, $N = 0$ となるので,

$$0 = \frac{d - x_0}{d} Mg \quad \therefore \quad x_0 = d \left(= \frac{(M + m)g}{k} \right)$$

(9) $m = M$, $s = 2d$ のとき, 初期条件 $x(0) = -s$, $\dot{x}(0) = 0$ を満たす解は,

$$x(t) = -2d \cos \left(\sqrt{\frac{k}{2m}} t \right) = -2d \cos \left(\sqrt{\frac{g}{d}} t \right)$$

$x = d$ に達して物体が台から離れる時刻 t_0 は,

$$d = -2d \cos \left(\sqrt{\frac{g}{d}} t_0 \right) \quad \therefore \quad t_0 = \frac{2\pi}{3} \sqrt{\frac{d}{g}}$$

このときの速さ v_0 は,

$$v_0 = \left| 2d \sqrt{\frac{g}{d}} \sin \left(\sqrt{\frac{g}{d}} t_0 \right) \right| = \sqrt{3gd}$$

【2】

《解答》

I.

- (1) おもりが OP から受ける垂直抗力の大きさを N 、静止摩擦力の大きさを f (O→P 向き正) とする.

OP と水平面とのなす角度が $\alpha (\leq \theta)$ のとき、おもりが受ける力の OP 方向の成分、OP に垂直な成分のつり合いの式は、

$$\begin{cases} 0 = N - mg \cos \alpha \\ 0 = mg \sin \alpha - f \end{cases}$$

また、このときおもりは静止し続けるので、

$$f \leq \mu N \quad \therefore \quad mg \sin \alpha \leq \mu \cdot mg \cos \alpha$$

等号が成り立つとき $\alpha = \theta$ なので、

$$\tan \theta = \mu$$

- (2) 動摩擦力は O→P 向きで大きさ $\mu' N = \mu' mg \cos \theta$ であるから、仕事を W とすると、

$$W = -\mu' mg \cos \theta \cdot l \quad \therefore \quad |W| = \mu' mgl \cos \theta$$

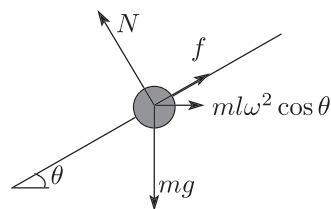
- (3) 全力的エネルギーの変化量は、動摩擦力のする仕事に等しいので、求める速さを v とし、点 O を重力の位置エネルギーの基準とすると、

$$\begin{aligned} \left(\frac{1}{2}mv^2 + 0 \right) - (0 + mgl \sin \theta) &= -\mu' mgl \cos \theta \\ \therefore \quad v &= \sqrt{2gl(\sin \theta - \mu' \cos \theta)} \end{aligned}$$

- (4) $m(l \cos \theta)\omega^2 = ml\omega^2 \cos \theta$

- (5) おもりとともに角速度 ω で回転する観測者から見た場合で考える. おもりが受ける力の水平成分、鉛直成分のつり合いの式は、

$$\begin{cases} 0 = N \sin \theta - f \cos \theta - ml\omega^2 \cos \theta & \dots \textcircled{1} \\ 0 = N \cos \theta + f \sin \theta - mg & \dots \textcircled{2} \end{cases}$$



① $\times \cos \theta$ - ② $\times \sin \theta$ より、

$$f = m(g \sin \theta - l\omega^2 \cos^2 \theta)$$

$\omega = \omega_0$ のとき $f = 0$ となるので、

$$0 = m(g \sin \theta - l\omega_0^2 \cos^2 \theta) \quad \therefore \quad \omega_0 = \frac{1}{\cos \theta} \sqrt{\frac{g \sin \theta}{l}}$$

(6) ① $\times \sin \theta +$ ② $\times \cos \theta$ より,

$$N = m \cos \theta (g + l \omega^2 \sin \theta)$$

おもりが静止し続けるための条件は,

$$-\mu \leq \frac{f}{N} \leq \mu$$

$$\therefore -\mu m \cos \theta (g + l \omega^2 \sin \theta) \leq m(g \sin \theta - l \omega^2 \cos^2 \theta) \leq \mu m \cos \theta (g + l \omega^2 \sin \theta)$$

ω について整理すると,

$$\sqrt{\frac{\sin \theta - \mu \cos \theta}{\cos \theta (\cos \theta + \mu \sin \theta)} \cdot \frac{g}{l}} \leq \omega \leq \sqrt{\frac{\sin \theta + \mu \cos \theta}{\cos \theta (\cos \theta - \mu \sin \theta)} \cdot \frac{g}{l}} (= \omega_m)$$

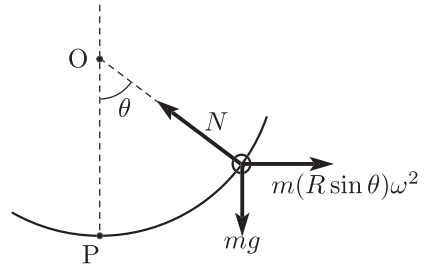
《参考》(1) で得た $\mu = \tan \theta$ を用いると, 上の不等式の左辺は 0 であることがわかる. 一方, 右辺は, μ を消去して次のように表してもよい.

$$\omega_m = \sqrt{\frac{\sin \theta + \tan \theta \cos \theta}{\cos \theta (\cos \theta - \tan \theta \sin \theta)} \cdot \frac{g}{l}} = \sqrt{\frac{2 \sin \theta}{\cos^2 \theta - \sin^2 \theta} \cdot \frac{g}{l}}$$

なお, ω_m が存在するためには, $\cos^2 \theta - \sin^2 \theta > 0$, すなわち $\theta < 45^\circ$ の必要がある. ところが, $\mu = \tan \theta$ と, 問題文に与えられた $\mu' < \mu < 1$ より, $\theta < 45^\circ$ は必ず成り立つ. つまり, $\mu' < \mu < 1$ という条件により, ω_m の存在は保証される.

II.

- (1) 針金とともに角速度 ω で回転する観測者から見た場合で考える. 小物体が受ける重力 (大きさ mg), 針金からの垂直抗力 (大きさを N とする), 遠心力 (大きさ $m(R \sin \theta) \omega^2$) は右図のように表される. 右図で θ が増加する方向を正として, 遠心力の接線方向成分 F_θ , 重力の接線方向成分 G_θ は, それぞれ,



$$\begin{cases} F_\theta = m(R \sin \theta) \omega^2 \cdot \cos \theta \\ G_\theta = -mg \sin \theta \end{cases} \quad \therefore \quad \begin{cases} |F_\theta| = mR \omega^2 \sin \theta \cos \theta \\ |G_\theta| = mg \sin \theta \end{cases}$$

《参考》小物体が針金に対して静止し続けるならば, $0 \leq \theta < \frac{\pi}{2}$ である.

- (2) 小物体が受ける力の接線方向成分のつり合いより,

$$\begin{aligned} 0 &= F_\theta + G_\theta \\ &= mR \omega^2 \sin \theta \cos \theta - mg \sin \theta \quad \dots \textcircled{1} \end{aligned}$$

$\theta \neq 0$ の場合について考えて,

$$\omega = \sqrt{\frac{g}{R \cos \theta}} \quad (\theta = 0 \text{ の場合も含めて成立})$$

(3) ①を満たす θ は, $\theta = 0$ (点 P) と,

$$\cos \theta = \frac{g}{R\omega^2}$$

を満たす θ (点 Q) である. 点 P 以外で静止することができるためには, $\cos \theta < 1$ より,

$$\frac{g}{R\omega^2} < 1 \quad \therefore \quad \omega > \sqrt{\frac{g}{R}}$$

(4) P に対する針金に沿った微小変位を x (反時計回り正) とすると, 小物体の接線方向の運動方程式は,

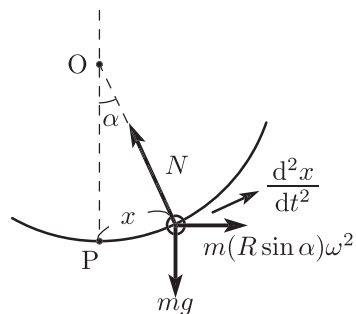
$$\begin{aligned} m \frac{d^2 x}{dt^2} &= F_\alpha + G_\alpha \\ &= mR\omega^2 \sin \alpha \cos \alpha - mg \sin \alpha \end{aligned}$$

ここで, $\cos \alpha \doteq 1$, $\sin \alpha \doteq \alpha = \frac{x}{R}$ より,

$$m \frac{d^2 x}{dt^2} = -\frac{m(g - R\omega^2)}{R} x$$

これより, 物体の運動は単振動であることがわかる. また, 振動中心は $x = 0$ (点 P), 角振動数は $\Omega = \sqrt{\frac{g - R\omega^2}{R}}$ である. よって, 周期を T とすると,

$$T = \frac{2\pi}{\Omega} = 2\pi \sqrt{\frac{R}{g - R\omega^2}}$$



【3】

《解答》

- [A] (a) 糸を切る前の左右の糸の張力の大きさは等しく、その値を T_1 とする。A が受ける力の鉛直成分のつり合いより、

$$M \cdot 0 = T_1 \cos \theta \times 2 - Mg \quad \therefore \quad T_1 = \frac{Mg}{2 \cos \theta}$$

左の糸を切った直後の右の糸の張力の大きさを T_2 とすると、運動方程式の向心成分は、

$$M \cdot \frac{0^2}{l} = T_2 - Mg \cos \theta \quad \therefore \quad T_2 = Mg \cos \theta$$

$T_1 = T_2$ であるためには、

$$\frac{Mg}{2 \cos \theta} = Mg \cos \theta \quad \therefore \quad \theta = \frac{\pi}{4}$$

- (b) 床を重力の位置エネルギーの基準とすると、力学的エネルギー保存より、

$$\frac{1}{2}MV^2 = Mgl(1 - \cos \theta) \quad \therefore \quad V = \sqrt{2gl(1 - \cos \theta)}$$

求める張力の大きさを T とすると、運動方程式の向心成分は、

$$M \frac{V^2}{l} = T - Mg \quad \therefore \quad T = Mg + \frac{MV^2}{l} = (3 - 2 \cos \theta)Mg$$

- [B] (c) A と B の衝突前後について、運動量保存と力学的エネルギー保存より、

$$\begin{cases} MV' + mv_B' = MV \\ \frac{1}{2}MV'^2 + \frac{1}{2}mv_B'^2 = \frac{1}{2}MV^2 \end{cases}$$

これらより、

$$V' = \frac{M-m}{M+m}V, \quad v_B' = \frac{2M}{M+m}V$$

A, B の衝突直後、C は速度 0 なので、

$$v' = \frac{mv_B' + m \cdot 0}{m+m} = \frac{M}{M+m}V$$

- (d) B, ばね, C を 1 つの物体とみなした物体を B+C とおく。B+C と A との間のはね返り係数は、

$$e = -\frac{V' - v'}{V} = \frac{m}{M+m} (< 1)$$

A と B との衝突で力学的エネルギーは失われないので、衝突直後の A の運動エネルギーと B+C の 力学的エネルギー の和は、衝突直前の A の運動エネルギーと一致する。ところで、B+C の力学的エネルギーは、B+C の重心の運動エネルギーと、重心から見た B, C それぞれの振動における力学的エネルギーの和に等しい。このた

め、衝突直後の A の運動エネルギーと B + C の 重心の運動エネルギー の和は、衝突直前の A の運動エネルギーよりも小さい。衝突により運動エネルギーの和が減少するので、A と B + C との衝突は非弾性衝突とみなせ、このため、はね返り係数 e は 1 より小さい。

(e) B + C の重心から見た初速度は、

$$\begin{aligned} \text{B} \quad \cdots \quad v_B' - v' &= \frac{M}{M+m}V \\ \text{C} \quad \cdots \quad 0 - v' &= -\frac{M}{M+m}V \end{aligned}$$

重心から見た運動量の和は 0 なので、重心から見た B の速度が 0 の瞬間、C の速度も 0 である。この瞬間の、ばねの伸びまたは縮みを X とすると、重心から見た力学的エネルギー保存より、

$$0 + \frac{1}{2}kX^2 = \frac{1}{2}m\left(\frac{M}{M+m}V\right)^2 \times 2 \quad \therefore \quad X = \frac{MV}{M+m}\sqrt{\frac{2m}{k}}$$

B, C 間の距離を x とすると、 x が最大のときは伸びが X で、 x が最小のときは縮みが X なので、求める距離差は、

$$x_{\max} - x_{\min} = \frac{2MV}{M+m}\sqrt{\frac{2m}{k}}$$



会員番号	
------	--

氏 名	
-----	--